

戦前・南洋の日本人町を歩く

第四部 ホイアンの日本人町(上)

作家

太田尚樹

●おた・なおき 1941年生まれ。東海大学名誉教授（スペイン文明史、比較文明論）。スペインに関する著作からノンフィクションまで幅広く執筆。最新刊は、『乱世を生き抜いた知恵 岸信介、甘粕正彦、田中角栄』（ベスト新書）。

あんなん
安南と呼ばれたヴェトナム



歴史紀行「戦前・南洋の日本人町を訪ねる」は、シ
ンガポールにはじまり、マレー半島、ペナン島、フィ
リピンのマニラ、ダバ
オ、そしてタイのアユ
タヤまで来たが、今回
はヴェトナムのホイア
ンになった。ヴェトナ
ムは戦前の日本では安
南と呼んでいたが、日
本近代史では仏印（仏

領インドシナ）として扱う場合が多い。十九世紀半ば、
フランス海軍のダナン砲撃からはじまり、以後植民地
化されていたためである。

一方ヴェトナムは、日本が太平洋戦争に突入する直
接の切っ掛けになった国でもあった。昭和十五年（一
九四〇）九月、日本陸軍はシナ事変解決のために北部
仏印進駐を強行した。ハノイを中継点にして欧米の戦
略物資が隣国中国に流れていたからである。曰く「援
蔣ルート遮断のため、ハノイ・ルートの封鎖」。この
強硬策は、四日前に締結された日独伊三国同盟の威力
が背景にある。当時フランスはドイツの占領下であり、
「ガラ空きになった仏印」「バスに乗り遅れるな」が日
本の戦争指導者の合言葉になった。そして翌昭和十六

年（一九四二）七月末、今度は日本海軍がサイゴン（現

ホーチミン市）に陸戦隊を送り込んで、「南部仏印進駐」
となったが、これは難航する日米交渉に決定的決裂を
もたらすことになった。航統距離三千キロを誇るゼロ
戦が、南部仏印に配備されると米国統治下のフィリピ
ン、蘭印（現インドネシア）が制空権内に入り、危機に
晒されるからである。石油の欲しい日本はむろん、蘭
印の油田地帯を制圧するのが狙いであった。

天然資源の豊富なマレー、軍事要塞化していたシン
ガポールを支配する英国も、脅威は同じである。

これで日米開戦となったのは歴史が示す通りだが、
本稿ではもつと時代は遡ることになる。戦国時代末期
から江戸時代にかけて、日本人が東南アジアに拓いた三
大日本人町はルソンのマニラ、タイ・アユタヤ、そし
てヴェトナムのホイアンである。だがヴェトナムは、
私には今までの南洋諸国にはない、重い課題を負って
いるように思われた。一九六五年から十年間つづいた、
あの忌まわしい戦争の地と重なるからである。

折しも一九六〇年代後半から七〇年代にかけて、米
国で学生生活を送っていた私には、ヴェトナム戦争は
対岸の火ではなく、自身の運命にかかわる事態を経験

したせいでもある。

届いた召集令状

そのころ突然、私に「〇月〇日までに、サンノゼの
陸軍歩兵部隊に入隊せよ」の令状が届いた。永住権の
申請をしていたことが原因だったのだが、急ぎ、申請
を取り下げてしまった。学費が安く済むという、至っ
て安易な理由で書類を提出していたにすぎない私は、
他国の戦争に巻き込まれるのは真つ平である。

そのころ米国各地では、昼間の町中を、ライトをつ
けたままゆつくりと走る星条旗に包まれた柩車を見送
ることが珍しくなく、私は米国人の友人の葬儀に出席
したこともあった。夕日が沈むころ棺が広い芝生墓地
の地中に収められた後、別れを告げる兵士の吹くラッ
パの悲しいメロディーを今なお忘れないでいる。この
頃から、かつて第二次世界大戦直後、英国首相ウィン
ストン・チャーチルがやってみせたVサインに対して、
掌をひっくり返したピース・サインが世界に流行るよ
うになったが、発信源は米国であった。

「戦争に勝者も敗者もない。直ちに戦争を止めて平和